

---

# 魔法少女リリカルなのは～その者、神を越えし力を持つ者

司馬遷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜その者、神を越えし力を持つ者

### 【Nコード】

N5565X

### 【作者名】

司馬遷

### 【あらすじ】

不慮の事故に遭い死んでしまった、主人公の護。

それは、神様の手違いで死んでしまったと聞かされ、落ち込むかと思いきや落ち込むことは無かった。

お詫びとして転生させたいと言われ、喜んで受けた。神をも越えるかも知れない力手に入れ、リリカルなのはの世界に旅立つのだった。

## 第一話 神を越える力（前書き）

なのはの世界に三國志と戦国の英雄達が次々と登場。他にもガンダムシリーズ、マクロスなどロボットアニメも登場します。

興味のある人は是非読んでください。

## 第一話 神を越える力

俺の名前は、神上 護

至って普通の高校生だ。

だがひとつだけ言えることがある。

それは、やたらと歴史が得意であることだ。

特に三國志については右に出る者はいない。

それに、兵法も長けている。

何故かってそれは、趣味で兵法書を読んでいるからだ。

まあ、そんなこんなで普通に暮らしていたんだが、ある日突然、思いもよらの事故に遭ってしまった。

護

(はあくやっ和学校終わったぜ。早く帰って寝るかな)

(ん！)

(まったく、こんなところでボールで遊んでじゃねえっの、引かれても知らねーぞ。)

と、内心思っていたら。

案の定ボールが道路に、それを一人の女の子がボールを取りに来た。  
(オイオイ、ちゃんと車を確認してから取りにいけよ。)

そう思っていたら、いきなりトラックが。

「あぶねえ!」

(間に合うか?)

(クソツ間に合わねえ)

「チッ!」

(こつなったら)

護は思いっきり跳んだ。

護は女の子を包み込むように庇った。

そのとたん、ものすごい音をたてながら引かれた。

(あれっ俺どうなったんだそうか俺引かれたんだ。)

「あつ、あの子は。良かった無事か。」

「ハア俺死んだのかこれからどうなるのかな。何よりあの子が無事でよかった。」

「あゝすいません」

「はい？」

振り返ると俺の後ろに大きな鎌を持った骸骨がいた。

「あんた死神か」

「はい、そうですが驚かないのですね。」

「別に驚かないよ。もう死んでるし。」

「そうですか。」

「少しお聞きしますがよろしいですか？」

「いいけど」

「どうしてあの子を助けたのですか」

「ああ、まあ俺にはあれ位の妹がいるから体がかつてに動いちゃったんだ。」

「そうでしたか。」

「それでお話しがございました」

「なんだ」

「付いて来て下さい。ある人に会わせたいので。」

「で、何処に行くの？」

「えーと神界に」

「何、神界だとー」

「はい、そうですが」

「どうして神界なんかに行くんだよ!」

「実は理由がございまして」

「理由ってなんだよ」

「まあ、それは本人から聞いて下さい」

「分かった」

死神に連れられてやってきたのは、まさしく神様が住んでいそうな立派な神殿だった。

「すげーな、まさしく神様の御殿だな!」

「当然です。神殿ですから。」

「さあ、着きましたよ、ここが神様がいらっしやるお部屋です。」  
と言って死神は扉に向かって叫んだ。

「神様、私です。神上 護を連れて参りました。」

「入れ。」

「失礼します。」

中に入るとそこには、一人の女性があたふたと机の上にある書類の山を片付けていた。

「ようこそ。神界へ、神上護さん。」

「なあ、死神さんよ」

「はい、何でしょう。」

「あんたが会わせたい人って、この人？」

「はい。そうです。」

「ところで、神様、俺に何の用なんだ。」

「それより、先ず、自己紹介を。私の名前はオシリスと言います。」

「オイ、オシリスってあの冥界の番人のオシリスか？」

「そうです。私のこと貴方は知っていたのですね。」

「ああ、知っている。」

「何故、私のこと知っていたのですか？」

「俺は、歴史が好きだから考古学にも興味がある。それで、エジプト考古学に冥界の番人としてあんたが出てくるから知っているんだ。」

「そうですか。では私の二つ名のことは知っていますか？」

「ああ、それも知っている。天空神オシリスだろ。」

「ッ！」

「正解です。どうしてそこまで知っているのですか？」

「それは、アニメで知ったから。」

「アニメですか。」

「どうやら、俺がそこまで知っていたことに驚いていたようだ。」

「で、俺に何の用なんだ？」

「実は、お気づきだと思っておりますが、ご覧の通り書類の山でして、それを片付けていたら、運悪く貴方のその書類にも印を押してしまいました。本当なら、貴方は、あの時助かっていたのですが、私が印を押してしまったので、貴方が死ぬはめになってしまったのです。」

「そうなんだ。」

「申し訳ありません。」

「まあ、いいけどね。」

「えっ！」

「神様も大変なんだなって思ったからね。」

「ありがとうございます。」

「ですが、せめてお詫びをしたいので、転生させたいと思いますが。」

「転生ねえー」

「どうしますか？」

転生・それは一度死んだ人間が別の世界で生まれ変わることに。

「せっかくだし、転生するよ。こんなことめったにないからね。」

「分かりました。」

「それでは、まず転生するにあたって能力を決めることができます。」

「能力ねえー」

護は、自分が使う能力を考えていた。

「ん〜よし！決めた。」

「何でしょう。」

「まず、基礎能力は、全部EXで、魔力もEX。それと、追加効果で、状況・状態に応じて限界突破。相手に応じて魔力及び能力の補正。」

あと希少能力で、

森羅万象、

宝具生成、

時空切断、

重力制御、

次元生成、

神滅殺、

錬金合成、

魔力召喚、

獣神合体、

死者蘇生、

機人召喚、

希少能力は経験に応じて増加する。

これぐらいかな？」

「分かりました。」

「マジでいいの？」

「構いません。」

「それと、ひとつお聞きしてよろしいですか？」

「何？」

「この、神滅殺はどゆう意味でしょう？」

「ああ、まあこれは俺の予感なんだが、恐らく神界で反乱がおきると思うから、前もって備えておいた方がいいと思ったからね。」

「神界で反乱がおきると。護さんは言いたいのですね。」

「ああ」

「分かりました。」

「次に肉体を作ります。」

「そうだねえー。顔は男の娘みたいで、髪は金髪、長さは耳にかか  
るぐらいかな。」

「分かりました。」

「それでは、どこの世界に行きますか？」

「もちろん、リリカルなのはの世界に。」

「分かりました。」

「それでは、全てが整いましたので、転送致します。」

「あっ、待って。」

「何でしょう。」

「神界と下界を自由に行き来できるようにして欲しい。」

「何故ですか？」

「反乱の為に備えてね。」

「分かりました。それと、これを受け取ってください。」

「これは？」

「神界との通信機です。私と会話が出来ます。何かありましたら連絡下さいしてください。」

「分かった。ありがとう。」

「それでは、行ってらっしゃいませ。お気を付けて。」

「ああ、じゃーな。」

すると、足下に魔法陣が現れ、護を光が包みやがて消えた。

オシリス

「護様どうかお気をつけて。」

(護様は神界で反乱がおきると言っていましたけど、本当なら一大事です。私も警戒しなければ。)

## 第一話 神を越える力(後書き)

策

「やっと一話出来たよ。」

護

「お疲れさん。」

策

「護、これから大変だけど頑張ってね。」

護

「もちろん、頑張るけど。でも、俺、チート過ぎねえ！」

策

「これぐらいしないと、面白くないから、それに、神との戦いもあるからね。」

護

「まあ、良いか。そろそろ俺の能力教えておいた方が良くないかなあ。」

策

「うん。そうだねえ！」 護

HP 体力EX

AT 攻撃力EX

DF 防御力EX

SP スピードEX

MP 魔力EX

追加効果

相手に応じて魔力及び能力の補正

状態・状況に応じて限界突破

希少能力

森羅万象

宝具生成

時空切断  
次元生成  
重力制御  
神滅殺  
錬金合成  
魔力召喚  
機人召喚  
獣神合体  
死者蘇生  
以上。  
それじゃ、  
また。

## 第二話 出会い

護

「着いたのか？ここは・・・海鳴市か。」

（体は小3ぐらいか。）

「さて、能力の把握しとくか。」

「まずは、森羅万象から。」

護は、手のひらに意識を集中した。

すると、手のひらに炎の球が出来た。

「こつやっつて出すのか。」

それを護は、水、雷、氷、風、土、闇、光、金、木とそれぞれの属性の球を作った。

木火土金水は陰陽五行。

「さて、これから武器を創るか。」

そう言うと、手のひらの球を炎に戻し、そこから、球を掴み形を整えていく。

すると、そこには日本刀の形をした赤い刀が現れた。

「意外と簡単に来るんだな。」

護は、その刀を使い近くにあった岩を切った。

すると、岩が溶岩のように溶けた。

「こいつは、凄いな。かなりの威力だ。よし。こいつの名前は、火<sup>えん</sup>炎にしよう。」

護は、刀を元に戻し炎を消した。

「さて、次は魔法だな。」

護は、まず変身魔法を使った。

すると、護は光に包まれ、やがて光が消えるとそこには体が大きくなった護がいた。

「こいつは、使えるな。」

今の護の姿は、何処から見ても大人姿である。

「今は、これぐらいにしとくか。とりあえず、人を探すか。」

そういうと護は、街の方へと向かうのだった。

なのは

（私、高町なのは。私立聖祥大学付属小学校の3年生です。私の家族は5人家族で、お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんがあります。

お父さんとお母さんは、今でも新婚さん気分です。

お兄ちゃんとお姉ちゃんもとても仲が良いです。  
私、一人だけ浮いている気がします。( )

「おはよう、お父さん、お母さん。」

「おはよう、なのは。」

(この人は、高町士郎さん、私のお父さんです。)

「おはよう、なのは。ひとりで起きられたわね。偉いわ。」

(この人は、高町桃子さん、私の大好きなお母さんです。)

「あつ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。おはよう。」

「おはよう。」

(この人は、高町恭也さん、私のお兄ちゃんです。)

「おはようー。なのは。」

(この人は、私のお姉ちゃん、高町美由希さん。)

(こんな感じで、普通の小学生なんですが、あの日を境にこれまでの生活が一変します。)

???

夜、一人の少年がこの世界のとは思えぬ物と戦っていた。

「ハァー！」

「クツ！強い。早く封印しなきゃ。」

すると、彼の前に魔法陣が現れた。

魔物と思わしき物体は彼に襲い掛かるうとしている。

「食らえ！」

魔法陣から光が放たれ魔物に当たるが倒すことは、できなかった。

体力を使い果たしたのか、彼は倒れてしまった。

「追わ……なきゃ。」

彼は光に包まれ動物の姿へと変わった。

翌日の朝

「それじゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい。気を付けてね。」

「はい、行ってきますー。」  
.....

「アリサちゃん、すずかちゃん、おはよう。」

「おはよう。なのは。」

(この子は、私のクラスメイトで友達のアリサ・バニングスちゃん。

」

「なのはちゃん、おはよう。」

（この子は、月村すずかちゃん。二人とも私の大切な友達です。）  
・・・放課後・・・

「二人とも今日、塾だよね。」

「そうだけど。」

「それじゃあ、途中まで一緒に帰ろう。」

「いいよ。」

・・・

「アリスちゃん、どこ行くの?」

「こっちから行った方が近いのよ!」

「でも」

「ほら、行くわよ。」

「・・・うん。」

（助けて!）

（えっ!）

(お願い、助けて！)

「どうしたの、なのは？」

「何か今、聞こえなかった。」

「別に何も、聞こえなかったけど。」

(助けて！)

(ッ！)

なのはは、声のする方へと走りだした。

「ちょ！ちょっと何処に行くの、なのは！」

なのはは、ひたすら声のする方へと走った。

「どっ！？」

すると、一匹の動物が倒れていた。

「ちょっと、なのは！いきなり走りだして何処に」なのはちゃん。  
その子怪我してるよ！」「本当だ！」

「う、うん。」

「どっしたら、良いかな？」

「とりあえず、病院よ！」

「違うよ！獣医さんだよ！」

「知り合いに獣医さんがいるから、電話してみる。」

・・・

しばらくして獣医の先生がやってきた。

「先生、この子大丈夫ですか？」

「えー。大丈夫よ。」

「この子、なんて動物だろう？」

「私もこんな動物初めて見たわ。」

「フェレットの仲間かな？」

「多分。そうだと思うけど。」

「あっ気が付いた！」

「なのは、見られてるわよ。」

「う、うん。」

なのはは、指をフェレットに近付けた。

「チロツ」

「かわいい」

「寝ちゃった。」

「誰かこの子、預かってくれる子いないかしら。」

「私の家は食材を扱うから原則的にダメ出し。」

「私の家は犬がいるから。」

「私の家も、猫がいるし。」

「・・・親に相談してみる。」

「それじゃあ、しばらくの間、こちらで預かっておくわ。」

「あつ！塾に遅れちゃう。早く行かなきゃ。」

「気が向いたら、様子見に来てね。」

「はい。先生、さようなら。」

なのはは、まだ知らない。自分の運命が動き出したことを。

一方その頃、護はと言つと。

「結構いい街だな。まずは、家を探さないと。まあ、無くてもしっかりいいんだけどね。」

護は、家を探していた。

「この年で、野宿は流石にマズいよな。補導されても困るし。」

「それより、お金だよ、お金。お金が無いと何にも出来やしない。」

「どうすつかねー。」

お金のことで護は悩んでいた。

「そつだ！変身魔法で大人の姿になってバイトすれば良いか。」

「よし。当分は、それでいくか。」

「あっ！でも。錬金合成で金作れるんじゃない。試しにどっかでやってみるか。」

人気の無い場所に移動すると、まず鉄を取出し、銀に変えて、それを金に変えた。

「やべえー。出来ちゃった。こりゃあ、当分、金に困らないわ。」

護は、早速、質屋に行くと金売った。

「結構いい値段で売れちゃった。」

純金だったのが幸いして、数百万単位で売れた。

「よし。まず飯食って、ホテルにでも泊まるか。」

飯を食った護は、ホテルの部屋を借りた。

「結構、広いじゃん。この部屋。」

そう。この部屋、大人が2、3人泊まれるような大きさだ。

「さて、そろそろ、動き出す頃かな？」

「見物に行こうかね。」

護は、そういうと、窓から外に出て行った。

なのは

「（あの子のこと、面倒見ても大丈夫だって。明日、引き取りに行くよ。）と、送信。」

（僕の声聞こえる？）

（ッ！）

（聞こえるなら、急いで僕の所に。急がないと大変なことになる。）

「この声、あの時の。」

なのはは、急いで服を着替えて、動物病院に向かった。

動物病院に着いた、なのはは、謎の物体に襲われている、フェレッ

トを目撃した。

「何なのこれ〜」

「キユツウ」

「あっ！あの子」

なのはは、とっさに腕を伸ばし、フェレットを抱き締めた。

「ありがとう。来てくれたんだね！」

「しゃっ！喋った！」

「何なのあれ〜」

「君に、お願いがあるんだ。」

「えっ！」

「僕に力を貸して欲しいんだ。」

「お礼は必ずします。」

「どうしたらいいの？」

「僕の代わりに戦って欲しいんだ。」

「戦うって、どうやって。」

「これを、使って！」

「僕の言う通りに続けて。」

「うん。分かった。」

「じゃあ、行くよ。」

「我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり。」

「契約の下、その力を解き放て。」

「契約の下、その力を解き放て。」

「風は、空に。星は、天に。」

「風は、空に。星は、天に。」

「そして、不屈の心は。」

「そして、不屈の心は。」

「この胸に。レイジング・ハート、セットアップ」「

「スタンバイレディ、セットアップ」

「うわぁー」



## 第二話 出会い（後書き）

策

「何とか、第二話が出来たよ。」

護

「なかなか、良いんじゃない？」

策

「だと、いいけどな。」

護

「心配すんなって。」

策

「そう言えば、俺、あんまり出て来なかったな。」

護

「まあ、この話は、原作の第一話を持って来てるから。」

策

「そうかい。道理で少ない訳だ。」

「次の話しは、なのはの初戦闘。一体どうなる」とやら。」

護

「オイ！まさか、原作どつりに終わらせるんじゃないよな？」

策

「そんな訳あらへんやろつて」

護

「ネタ、古いぞ！」

策

「もちろん、そう簡単に終わらせたりしませんよ。」

「護の、活躍場所もちゃんと作りますよ！」

「普通に終わらせたら、チートの意味全く無いでしょ。」

護

「まあ、次回作に期待しよう。」

策・護

「」では、また次回お会いしましょう。」



### 第三話 初戦闘

なのはは、魔物と向かい合った。

なのは

「どうしたらいいの？」

「今は、倒すしかないよ。」

「そんなこと、言われても。」

「来るよー！」

「えっ！うわぁっ！」

なのはは、とっさにレイジング・ハートを振りかざした。

LH「PROTECTION」

「えっ！」

「とにかく、逃げようー！」

「う、うん。」

「大丈夫、心を澄まして、そしたら、魔法の呪文が見えるはずだよ。」

「



「わ、分からない。僕にも、こんなこと初めてだ。」

そこには、さきつの魔物とは違う魔物が立っていた。

「さきつの魔物と違う。」

「そ、そんな！レベルが違い過ぎる！」

「どうしたらいいの？」

護

「やっと出番かよ。待ちくたびれたぜ。」

「えっ！誰！」

「この結界のなかで、何故、君は動けるんだ？」

「それは、後で話す。それより、まずアイツを片付けないとね。」

「属性把握！」

「なるほど、炎か。」

「それなら、翡翠。」

そういうと、護は、水の球を作りだした。

そして、その球を刀にした。

そこには、青緑の色をした刀があった。

「さあて、おっぴじめますか！」

「まずは、小手調べと行きましょ。」

「水派、水斬波。」

護は、翡翠を振った。

すると、水の波ができ、魔物に襲い掛かる。魔物は、それを簡単に避ける。

「がたいの割りには、すばしっこいね。」

そう、魔物の大きさは、護の2倍はある。

「じゃあ、こつちも、ちょっと本気出して見ようかね。」

護は、目にも止まらぬ速さで魔物に斬り掛かる。

「ハッ！」

すると、魔物の右腕が一瞬で切り落とされた。

「まだまだ！」

すると、次は左腕が落ちた。

「もういっちょ」

今度は、両足が切り落とされた。

「すごい！凄すぎる。しかも、速い。」

「んじゃ、止めと行きますか。」

「必殺。水派、水流裂斬。」

護は、目にも止まらぬ速さで斬撃を繰り出す。

「FINISH」

ドカーン

ものすごい爆発音と共に魔物は、消し去った。  
煙りが晴れると、そこには、無傷のジュエルシールドが。

「さあ、早く封印を。」

「は、はい……」

「ジュエルシールド封印」

「H」No.21「」

「ありがとう。レイジング・ハート。」

「ところで、君は高町なのはちゃんの良いのかな？」

「は、はい……そうです。」

「それと、そっちのフェレットはユーノ・スクライアでいいかな？」

「どうして、僕の名前を？」

向こうからサイレンの音が聞こえ始めた。

「おっと！その前にここを元に戻しておかないと。」

戦闘があつた場所は、悲惨な状況になっていた。

「うわぁー」

「マジック  
魔法発動。」

FIELD RECOVERY」  
フィールドリカバリ

すると、みるみる内に元に戻っていく。

「よし。これでいいだろう。」

「君たちも、早く帰った方がいいだろう。」

「は、はい！」

「それじゃあ、運が良ければ、また会おう。」

なのは

「やっと出番かよ。待ちくたびれたぜ。」

「えっ！誰！」

（振り返るとそこには、金色の髪をした男の人がいました。）

「この結界のなかで、君は何故、動けるんだ？」

（フェレットの子が言いました。）

「それは、後で話す。それより、まずはアイツを片付けないとね。」

「属性把握！」

「なるほど、炎か。」

「それなら、翡翠。」

（男の人は、手に水の球体を作って、それを刀の形にしました。）

（男の人の手には青緑色に光る刀が握られていました。）

（綺麗。私は、彼の持つ刀に見惚れていました。）

「さあて、おっぱじめますか！」

「まずは、小手調べと行きましょう。」

「水派、水斬波。」

（男の人がそう言うと、刀を振り下ろした。

すると、水の波ができて、魔物に向かって行きました。魔物は、それを簡単に避けてしまいました。）

「ほうー。がたいの割りには、すばしっこいね。」

(魔物は、男の人の2倍はあります。)

「んじゃ、こっちも、ちょっと本気出して見ようかね。」

(そう言つと、男の人は目にも止まらぬ速さで魔物に斬り掛かりました。)

「ハッ」

すると、魔物の右腕が一瞬で切り落とされました。

「すごい！凄すぎる。しかも、速い。」

(私は、驚きました。何が起きてるのか、全く分かりません。)

「まだまだ!」

(男の人がそう言つと、次は左腕が切り落とされました。正直言つて付いて行けません。)

「もういっちょ」

(今度は、両足が切り落とされました。)

「んじゃ、止めと行きますか。」

「必殺。水派、水流裂斬。」

(そう言つと、男の人は、目にも止まらぬ速さで斬撃を繰り出しま

す。)

「FINISH」

(大きな音と共に魔物は消え去りました。)

「さあ、早く封印を。」

「は、はい!」

(そう言われたので、私は急いで封印しました。)

「ところで、君は高町なのはちゃんの良いのかな?」

「は、はい!そうです。」

(ふと、男の人が私の名前を言ったので、驚きました。)

「それと、そっちのフェレットはユーノ・スクライアでいいかな?」

「どうして、僕の名前を?」

(しばらくすると、向こうからサイレンの音が聞こえてきました。)

「おっと!その前にここを元に戻しておかないとね。」

(私は、驚きました。戦闘があつた場所は悲惨な状況になっていました。)

「うわぁー」

(すると、男の人は、カードみたいな物を取り出して呪文を唱えました。)

「魔法発動。」

マジック

FIELD RECOVERY

フィールドリカバリ

(そう言うと、カードが光り、みるみる内に元に戻っていきます。)

「よし。これでいいだろう。」

「君たちも、早く帰った方がいいだろう。」

「は、はい!」

「それじゃあ、運が良ければ、また会おう。」

「私達も、早く帰らなきゃ。」

(私はまだ、知りませんでした。彼の力も目的も。)

そして、彼の本当の姿も。)

護

「さて、接触には成功したから。後は、どうするかな?」

「いつまでも、暇を持て余す訳にはいかないよな?」

「そうだ！学校に行けばいいか！」

「でも、それだと、親が必要になるよな。」

「何とかしないと。」

護は、そう考えていると、何かをひらめいた。

「そうだ！魔力召喚！」

「魔力召喚で親代わりになる人を召喚すれば良いか。」

「さて、誰にしよう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よし。決めた。」

護は、魔法陣を展開して、呪文を唱えた。

「我の声に応えよ。」

契約の下、その姿を現せ。

契約せしは、諸葛亮孔明・黄月英。

契約者、神上護。

魔力召喚！」

すると、二人の男女が現れた。

「よし。成功！」

「殿、お呼びでしょうか？」

一人の男が聞いた。

「ああ、二人に折り入って話がある。」

「何でしょう。」

一人の女性が言った。

「二人に俺の親になって欲しいんだ。」

「親にですか？」

「ああ。」

「何故ですか？」

「この世界には、俺の親はいない。  
学校に通うにせよ、親がいなければ、通えない。」

「それに、お前たちは頭が良い。」

「だから、お前たちに頼んでいるんだけど。」

「分かりました。殿の仰せのままに。」

「承知致しました。」

「すまんな。」

「いえ。」

「さて、後は学校だな。」

「孔明・月英！」

「はい。」

「入学手続きを頼む。」

「承知致しました。」

「どちらの学校に致しますか？」

「私立聖祥大付属小学校。」

「分かりました。」

「殿、手続きが終わりました。」

「ありがとうございます。」

「高町なのは、どう反応するか楽しみだな。」

翌日

「初めまして、転校生の、神上護です。よろしくお願いします。」



### 第三話 初戦闘（後書き）

遷

「第三話 やっと出来たよ。」

護

「俺、活躍してたな。」

「しかも、ついに出てきたよ、三国志の武将が。」

遷

「待ちきれませんでした！」

「それじゃあ、今日出てきた、二人のこと紹介するね。」

諸葛亮

字は孔明

蜀漢の丞相

蜀の名軍師

三顧の礼で有名

黄月英

諸葛亮の妻

天才発明家

黄承彦の娘

「これぐらいかな？」

「それじゃあ、また次回お会いしましょう。」

## 第四話 転校生

「初めまして、転校生の、神上護です。よろしくお願いします。」

なのは

（私は、転校生に見惚れていました。それと同時に、驚いてしまいました。）

昨日、会った男の人に似ていたからです。（

「それじゃあ、神上君は、高町さんの隣の席ね。」

「はい。」

（そう言うと、神上君は、私の隣の席に座りました。）

「よろしくね！高町さん。」

「う、うん。／＼／＼よろしく。」

（私は、今、とってもドキドキしています。格好良かったから／＼／＼／＼）

「じゃあ、授業を始めます。」

「あっ！高町さん。」

「は、はい...」

「教科書、神上君に見せてあげて。」

「あっ、はい」

「じめんね。」

「ううん、いいよ。」

「ありがとう。」

「ッ！／／／／／」

「う、うん。」

（あーもう心臓が爆発しそうだよ。／／／／／）

「じゃあ、この問題。」

女王卑弥呼が遣いを送った中国の国の名前は？

早速だけど、神上君！

「あっ、はい！」

「この問題。解けるかしら？」

「はい！」

「女王卑弥呼が遣いを送った中国の国は、三国時代の魏と言つ国で

す。

当時の皇帝は明帝、曹叡。文帝、曹丕の子供です。」

「あ、ありがとう。」

「凄いわね！」

「これぐらい、簡単ですよ。この時代は得意分野ですから。」

「へえー。そうなんだ。」

(私は、凄いなと思いました。)

キーンコーンカーンコーン

「あっ、もう終わりの時間ね。」

起立、礼

「「「「「ありがとうございました。」」」」」

護

「ふうー疲れた。」

「神上君！凄いね。」

「ん、体したことないよ。」

「でも、凄いよ。」

「あ、ありがとう。」

なのはと話していると、アリサとすずかがやってきた。

「ちょっと、お二人さん。仲良くし過ぎじゃない？」

「そうかな？普通に話しているだけだけど。」

「ばかじゃないの？」

遠くから見たら、仲のいいカップルにしか見えないじゃない！

「えっええー！ー！ー！」

カツ、カップル／／／／／なんてそんな事ないよ／／／／／  
／  
／

「まあ、二人共そこまでにしといたら。」

「あんたのことも言ってるのに、やけに冷静じゃない。」

「別に女の子と仲良くしたらダメと言うわけでもないだろ？」

「そりゃ、そうだけど。」

「それに、可愛い女の子と仲良くしたいしね！」

「どっせ、なのはだけなんでしょう？。」

「いいや。アリサとすずかもだよ。二人も十分可愛いし。」

「なっ！／＼何言ってるのよ！／＼／＼／＼／＼あんだ、何言ってるのか分かってるの！／／」

「かつ／＼可愛いだなんて。／／／／／／」

「そ／／それより、自己紹介もしてないのにどうして私たちの名前、知ってるのよ！」

「まあ、この街をちょっと調べたら二人の家がとても有名だったからね。」

「そ、そう。それなら、自己紹介しなくても良いわね。」

「あつ、次の時間、体育だっけ。着替えないと。」

「そ、そうだね。」

「さて、僕も、着替えないと。」

なのは・アリサ・すずか

「う、うう／／／」

「なのはちゃん大丈夫？」

「大丈夫な訳無いよ！」

「アリサちゃんも大丈夫？」

「だ／＼大丈夫な訳無いでしょ！」

「二人共、顔赤いよ。」

「そう言うすずかだって、顔赤いじゃない！」

「う、うう〜」

「あんな／＼面と向かって、言われるなんて。」

「でも、正直言って嬉しい。／＼／＼／＼」

「う、うん。」

「あーもう。あんなこと言われたら意識しちゃうじゃない、次の体育の時間、アイツと勝負よ！」

「「何で？」」

「割り切れないじゃない。意識してたら、話せないじゃない。」

「でも勝負って、無茶だよ！」

「そつだよ！神上君は男の子だよ！」

「勝てるわけ無いよ！」

「戦ってみなくちゃ分からないでしょう！」

「待ってなさい。コテッパンにしてやるんだから！」

「アリサちゃん、大丈夫かな？」

護

「さて、着替え終えたし、グラウンドに行くか。」

しばらくすると、なのは達がやってきた。

「神上護！」

「何だよ、アリサ」

「私と、勝負しなさい！」

「……………」

「ええ————」

「何で？」

「あんたがあんなこと言うからよ！／＼」

「あんなこと？はて？」

護は、自分の言ったことを思い返した。

「あつ、あれか！」

「つまり、照れてる訳ね。」

「ッ！／＼／」

「うるさい、うるさい、うるさい」

「そんなに大きな声で言わんでも。」

「いい、勝負よ！」

「分かったよ。」

「で、何で勝負するの？」

「50m走よ！」

「まあ、別に良いけどな。」

「それじゃあ、ウォーミングアップに行くか。」

「フン！」

「ハア」

「先が思いやられるぜ。」

なのは

「護君行っちゃった。」

「アリサちゃん、本当に大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ。」

「勝つ自信なんて無いもの。」

「それじゃあ、どうして勝負なんか。」

「こうでもしないと、理性が保て無いのよ。」

「アリサちゃん・・・」

「さあ、行きましょ。」

ウォーミングアップが終わり、勝負の時間が迫りました。

護

(アリサの野郎、俺に勝てないと分かかって勝負挑んで来やがって、無茶しやがる。)

(まあ、様子を見るとするか。)

「位置に付いて。よーい、ドン」

二人は一斉に飛び出した。

「勝つのは、私よ！」

アリサが飛ばし始めた。

（無茶しやがって！）

護は、アリサのスピードに合わせる。

「どうした、アリサそんなもんか？」

（挑発してみつか）

護は、アリサを挑発してみる。

「クッ！」

アリサは負けじとスピードを上げる。

（勝たせてやるか。いや、それじゃあアリサが嫌がるだけだ。）

「あまい！」

護は、迷いを振り切り、一気に加速してアリサを追い抜いた。

「勝負有ったな。アリサ。」

「ハアー、ハアー、ハアー」

「まだ、終わってないわ！」

「まだ、やる気か？」

「当たり前、じゃない！」

「そうか、ならいつでも相手になろう！」

そう言うと、護は着替えに行った。

アリサ

（大丈夫、私なら勝てる。）

「位置に付いて、よーい、ドン」

（私とアイツは一斉に飛び出した。）

「勝つのは、私よ！」

（私は、最初から飛ばした。でも、アイツは、私に合わせるかのよう  
うに追い付いて来た。）

「どうした、アリサ、そんなもんか！」

（私は、アイツの挑発にまんまと乗ってしまった。）

「クッ！」

（私は、更に飛ばした。）

「ハアー、ハアー、ハアー」

（キツイ。もう少しでゴール）

「あまい！」

（声が聞こえたと思ったら、アイツは、私を一気に追い抜いてしまった。）

「えっ！」

（うそ、でしょ。）

まだ、全力じゃなかったの。）

（私は、啞然としていた。）

「勝負、有ったな！」

「ハアー、ハアー、ハアー」

「まだ、終わってないわ！」

「まだ、やる気か？」

「当たり前、じゃない！」

「そうか、ならいつでも相手になろう！」

そう言っと、アイツは、着替えに行った。

「アリサちゃん・・・大丈夫？」

「やっぱり、勝てなかった・・・」

「アリサちゃん・・・」

「でも、まだ、諦めたくない！」

「私は、アイツに勝ちたい！」

「だから、諦めたくない！」

「アリサちゃん・・・」

（諦めたくなんかない！絶対に！）

「アリサちゃん！私たちも手伝うよ！」

「ありがとう、なのは、さすが。」

（そうよ。何度でも、勝まで挑戦してやるんだから！）

そして、アリサは幾度となく護に挑戦しては、振り返ちに遭うのだった。

「アリサ、いい加減諦めろ。」

「嫌よ！」

「私は、絶対に諦めない！」

「そうか、好きにしる。」

「アリサちゃん、もう止めよう。これじゃアリサちゃんの体持たないよー！」

「心配しないで、大丈夫だから。」

（でも、まさかあんなことになるなんて、私、思わなかった。）

## 第四話 転校生（後書き）

遷

「第四話出来ました。」

護

「お疲れさん。」

「それにしても、今回は、アリサが中心だったな。」

遷

「まあ、ね。」

「ところで、護。何か気付いたことない？」

護

「気付いたこと？」

「そうだな。」

「え〜と、あつ！」

「テメエ、なにちゃっかりフラグ立ててんだよ！」

遷

「まあまあ、良いじゃないの。」

「モテる子は、辛いね。」

護

「この野郎!」

遷

「てなわけで、次回は、アリサちゃんと仲直り。」

「それじゃあ、またね!」

## 第五話 仲直りと絆の力（前編）

アリサ

絶対に諦めないんだから！

そう、思いつつ、迎えが来るのを待っていました。

待っていると、数人の男達がやってきました。

「ねえー。お嬢ちゃん、俺達と一緒に遊ばない？」

私は、行儀良く、お断りしました。

「残念ですが、お断りいたします。」

「そんな堅いこと言わずにさ。」

肩に手を乗せたので、イラッとききました。

「ちょっと！止めて下さらないかしら？」

「そんなこと、言わずにさ。」

あまりにしつこいので

「いい加減にして下さいー！」

（怒鳴ってしまいました。）

「チツ！」

感に触ったのか、不機嫌な様子

「あーもう。連れて行け！」

「あっ！ちよっ！なに！  
ツッン！」

(なに・・・これ？眠く・・・)

「急げ！」

「出せ！」

男達は、アリサを車に連れ込み走り去った。

すずか

「あれ？アリサちゃん？」

「ッ！」

私は、アリサちゃんが男達に連れ去られるのを目撃してしまいました。

「アリサちゃん！」

(どろじいぶじ?)

(警察かな?でも、もしかしたら、アリサちゃんの身に危険が迫るかもしれないし。)

そう思っていたら。

「どうした?すずか?」

そこには、神上君がいました。

「神上君!アリサちゃんが!」

「アリサがどうした?」

「攫われたの!」

「何!?!」

「男の人が数人で、アリサちゃんを」

「すずか!」

「な、何?」

「お前は、警察を呼べ!」

「で、でも。」

「恐らく、犯人達の狙いは身代金目当てだろう。」

「お前は、早く警察にこの事を知らせるんだ。」

「う、うん。分かった!」

「それと、人の命が掛かってるから、事を大きくするなと警察に伝えておけ。」

「いいな。」

「うん。分かった。」

「頼むぞ!」

「佐助、半蔵、かすが。」

神上君がそう言うと、いきなり3人の男女が出てきました。

「お呼びでしょうか?」

「任務を与える!」

「ハッ!」

「アリサ・バニングスの搜索及び、保護。以上!」

「「御意」「承知」」

「かすが!」

「ハッ！」

「お前は、彼女の保護を最優先とする！」

「分かりました。」

そう言うと、3人はあっという間にいなくなっていました。

「あっあのー、神上君！」

「あー、彼等は僕の忍だよ。」

「忍って？」

「そんなことより、早く連絡を！」

「う、うん。」

「さて、僕も探しに行くか！」

そう言うと、神上君はさっきの人たちと同じようにあっという間にいなくなっていました。

「やっぱり、神上君って普通の人じゃない気がする。」

護

俺が着替えて学校から出ると、校門付近でうろつろしているはずか

を見つけた。

「どうした？すずか？」

「神上君！アリサちゃんが！」

「アリサがどうした？」「攫われたの！」

「何！！！」

「男の人が数人でアリサちゃんを！」

（恐らく、攫ったのは身代金目当てだろう。）

「すずか！」

「な、何！」

「お前は、警察を呼べ！」

「で、でも。」

「犯人達の狙いは恐らく、身代金目当てだろう。」

「お前は、早く警察にこの事を知らせるんだ。」

「う、うん。分かった！」

「それと、人の命が掛かってるから、事を大きくするなと警察に伝えておけ。」

「いいな。」

「うん。分かった。」

「頼むぞ！」

「佐助、半蔵、かすが！」

俺が3人の名前を呼ぶと、3人の男女が現れた。

「お呼びでしょうか？」

「任務を与える！」

「ハッ！」

「アリス・バニングスの搜索及び、保護。以上！」

「「御意」「承知」」

「かすが！」

「ハッ！」

「お前は、彼女の保護を最優先とする。」

「分かりました。」

3人は、そう言う間とあつという間に姿を消した。

「あっあのー、神上君！」

「あー、彼等は僕の忍だよ。」

「忍って！」

「そんなことより、早く連絡を！」

「う、うん。」

「さて、僕も探しに行くか！」

俺はそう言つたとあつという間に姿を消した。

「やっぱり、神上君って普通の人じゃない気がする。」

アリサ

「んっ・・・んっ」

（ここ何処だろう？）

（私、一体どうなったの？）

私は、少しずつ、目を開いていきます。

「おつ、気が付いたみたいだな。」

「私をどうするき？」

「どうもしないさ。」

「あんだ達の狙いは何？」

「狙い？まあ、金かな？」

「身代金目当てって事？」

「まあ、そうなるな。」

「あんだ達にやるような金なんて無いわ！」

「威勢が良いね！でも払わざる負えないけどね！」

「何ですって！」

「『払わなければ、娘の命は無い。』とお前の両親に伝えたからな、さすがに自分たちの娘を見殺しにするわけ無いだろうしね！」

「クツ！卑怯な！」

「まあ、何でか知らないけど、向こうはこうなる事が分かってたみたいだよ、連絡をした時にはもう警察が動いてたんだよね？」

「まっ、時間の問題だけだね！」

( 一体誰がこの事を警察に伝え・・・ )

私は、誰がこの事を警察に伝えたのかと考えていると思いがたった人が1人いました。

( ツーまさか、すずか！ )

私は、警察に知らせてくれたのが、すずかだと思いました。

佐助・半蔵・かすが

「いたか？」

「いいえ、街の方じゃないわ。半蔵は？」

「港でも無し」

「そう。」

「それじゃ、残るのは廃工場だな！」

「そうね！」

「半蔵、あなたは主のところへ行って伝えてきて、『恐らく、廃工場にいる』と。」

「承知」

「俺達は、廃工場だな！」

「行きましよう！」

そう言うと、半蔵は護の所へ、佐助とかすがは廃工場へと向かった。

護

「こっちの方じゃないか？」

俺も、アリサを探していると、半蔵がやってきた。

「主」

「どうした半蔵？アリサの居場所が分かったのか！」

「御意」

「何処だ！」

「恐らく、廃工場だと。」

「廃工場・・・分かった。」

「お前も早く2人の加勢に行け！」

「御意」

半蔵はそう言っていると、すぐにいなくなった。

俺は、アリサの居場所が分かったことをすずかに伝えることにした。

「……あつ、すずか！僕だよ。」

「神上君！どうしたの？」

「アリサちゃんの居場所が分かったよ！」

「えっ！本当！」

「うん。廃工場にいるから。迎えに来てあげて。」

「うん。分かったよ！」

「それじゃ。」

俺は、電話を切ると廃工場へと向かった。

すずか

私は、アリサちゃんの家にあります。

警察に連絡した後、アリサちゃんのご両親にも連絡しました。

「大丈夫かな？アリサちゃん……」

私がそう思っていると電話がかかってきました。

「はい。もしもし。」

「あつ、すずか、僕だよ。」

「神上君!どうしたの?」

「アリサちゃんの居場所が分かったよ!」

「えっ!本当!」

「うん。廃工場にいるから。迎えに来てあげて。」

「うん。分かったよ!」

「それじゃ。」

私は、神上君がアリサちゃんを見付けてくれたことに驚いてもいて嬉しくもありました。

「アリサちゃんが見つかったそうです!」

私がアリサちゃんのご両親に伝えると驚いたようです。

「それは本当か?」

アリサちゃんのお父さんが聞きました。

「本当です。」

「でも、一体誰が見つ付けてくれたんだ?」

「え〜と、私のクラスメイトで転校生の神上君です！」

「それじゃ、アリサちゃん達と同年と言つこと？」

「そう言つことになりますね。」

アリサちゃんのご両親はとても驚いていました。

「アリサちゃんは何処にいるの？」

アリサちゃんのお母さんが聞きました。

「神上君が言うには、廃工場にいますと言っていました。」

「それじゃ、迎えに行きましょう。」

.....

「ところで、すずかちゃん。」

「はい。」

「神上君とは言う子なんだい？」

アリサちゃんのお父さんが神上君のことを聞いてきました。

「え〜と、とても冷静で、アリサちゃんが勝負を挑んでも正々堂々と戦つて、全部神上君が勝つてました。それに、今回のことも、冷静に判断して、私がするべきことを教えてくれました。」

「そうなんだ。」

「お礼をしなきゃならんな。」

「そうですね！」

私たちはそう言うと、廃工場へと向かいました。

**第五話 仲直りと絆の力（前編）（後書き）**

遷

今回は、前後編に分けて書いてみました。

次回は、後編です。

楽しみにしてください。

第六話 仲直りと絆の力（後編）（前書き）

今回はビットの武器が出てきます。  
それではぶっしょ。

第六話 仲直りと絆の力（後編）

アリサ

私は、誘拐され、縛られている。

「遅いな」

男の人が愚痴をこぼす。

「いくら待っても意味ないわよ。」

「何故だい？」

「私のことなんかどうでもいいのよ！」

「無理しちゃって。」

「無理なんかしてない！」

「それならそれでいいんだけどね。」

「でも、それだと君が犠牲になっちゃうけど、いいのかな？」

「どう言う意味？」

「体で払ってもらおうと言うこと。分かった？」

「ッ！」

私はとても怖くなってきました。

（誰か助けてよ！）

そう思っていたら、何処からか声が聞こえました。

「やっと見つけたぜ！」

「本当、探すの苦労したんだから。」

「何者だ！」

そこには、2人の男女がいました。

「俺は、猿飛佐助。」

「私は、かすが。」

「俺達は、その子を助けるようにと、ある人から依頼を受けたのだ！」

「し、忍だと！」

「それじゃ、おとなしくその子を返してもらおうか。」

「ふざけんじゃねーよー！」

「こっちだって、雇われてやってるんだ！返すわけねえーだろ！」

「それなら、誰に雇われたか答えてもらおう！」

「知らねえーよ！」

「何？どういう意味だ！」

「名前は知らねえーよ」

「聞く前に、どっかにいきやがった。」

「そうか。」

「なら、早速その子を返してもらおうか。」

「行くぜ、かすが！」

「分かった。」

そう言うと、2人は男達に向かって行きました。

「させるか！野郎ども！奴らを止める！」

男達のリーダーがそう言うと、百人ぐらいの人達が出てきました。

「かすが！俺は奴らをやる。お前はそのすきにあの子を。」

「分かったわ」

2人は一気に走りだした。

「1人である数を相手にするなんて無理よ!」

「無理じゃないわ!」

振り向くと、そこには女の人が立っていました。

「い、いつの間に!」

「すぐに助けてあげるからね。」

「どうして助けに来てくれたの?」

私は、女の人に聞きました。

「ある人から頼まれたの、貴女を助けるようにって。」

「でも、一体誰が?」

「すぐに分かるわ。」

そう言うと、縄を解いてくれました。

「さあ、早く安全な場所に隠れてて」

「あっはい。」

私は、そう言うと安全な場所を探して隠れました。

「佐助!こっちは終わったわ!」

「それなら、こっち手伝ってくれ。」

「分かったわ。」

私は、驚きを隠せませんでした。

「凄い！たった2人であれだけの数を相手にするなんて」

2人を見ることに集中していた私は後ろから迫っている人に気付きませんでした。

「エツへへへ。捕まえたよお嬢ちゃん。」

「えっ！なっ！ちょっと離してよ！」

「しっしまった！」

「ハッハハハハ！これで貴様等も手出し出来まい。」

「クッ！」

「テメエら、殺つちまえ！」『おおー』

「そいつはどうかかな？」

声が聞こえたと思ったたらいきなり雷が落ちてきました。

「なっ何だ！」

そこには、私の知っている人が立っていました。

「待たせたな！佐助、かすが！」

「マスター」

「誰だ！テメエは！」

「僕かい？僕はその子の友達だよ」

「友達だと、ガキがナメてんじゃねーぞ！オラァ！」

「こつちには人質がいるんだ、手出しできるわけがない。」

「それもそうだけど、後ろには気をつけた方がいいと思うよ。」

「何？グハツ！」

男が気絶して私は解放されました。

すると、誰かに抱えられ護の所まで運ばれました。

「ご苦労、半蔵。」

「はっ！」

「お帰り、アリサちゃん」

「まさか、あんたが助けに来るなんて思ってもいなかったわ。」

「無事でよかったよ。」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「ああ、あホント役立つね」

護

「ああ、あホント役立つね」

「その声は、ヘルガ!」

「私のこと覚えててくれてたんだ。」

「忘れるわけないだろう!あれだけのことをしたんだからな!」

「それもそうよね」

「ヘルガ!何を企んでいる!」

「そうねー世界の破滅かしら?」

「何!またあの惨劇を繰り返すのか!」

「前は貴方に止められたけど、今度はどうかしら?」

「テムエ！」

「それじゃ、私はここで退散させて頂くわ。」

「待ちやがれ！」

「貴方たちの相手は彼等よ！」

「何！」

振り向くと、さっき倒した奴らが急に苦しみはじめた。

「まさか！」

「そのまさかよ、彼等にSEEDウイルスを感染させたのよ。」

「貴様と言う奴は！」

「安心なさい、当分は表に出るつもりはないから。それじゃね！」

「待ちやがれ！」

「クッ！やるしかないのか！」

俺はSEEDモンスターに向かい合った。

アリサ

何が何だか分からない。

どういうこと、ヘルガって言う人と護はどういう関係なの？  
それに、SEEDって何なの？

私の疑問は膨れるばかり、護は一体何者なの？

「アリサちゃん！」

護が話し掛けてきた。

「な、何！」

「アリサちゃんは安全な所に避難して危ないから。」

「佐助、かすが、半蔵！」

『はっ！』

「お前たちは、アリサを守れ！」

『御意』

私は3人と一緒に安全な所に避難しました。

「ねえーかすが。」

「何ですか？」

「護が言ってたSEEDって何なの？」

「私も詳しくは知りませんが、SEEDと言うのは感染型ウイルスのひとつで、一度かかったら最後元に戻ることは出来ないそうです。」

「どうして、元に戻る事が出来ないの？」

「解決方法が見つかっていないそうです。」

「そうなんだ。」

「詳しい事は、その時が来れば話してくれるでしょう。」

「そうね。」

私は、護が本当のことを話してくれるまで待つてる事にした。

護

「やるしかないのか！」

俺は、SEEDモンスターに向かい合った。

「安心しろ直ぐに楽にしてやる！」

「属性把握！」

「なるほど、闇か。」

「それなら、英月！」

俺は、光の力を集め刀した。

「直ぐに終わらせる！」

そう言うと、俺は英月を振った。

「月光斬！」

衝撃波が敵に襲い掛かる。

「ガアアアアア」

「止めだ！」

「月光連撃斬！」

「オラオラオラオラア」

「FINISH！」

「ガアアアアア・・・アア・・・」

「終わったか。」

アリサ

「凄い！もう勝っちゃった！」

だから、あれだけ挑んでも勝てない訳だ。

でも、あの人達人間だったのに護はどう思っているんだろう。

あれ？何か動いてる。

「ッ！」

「護！後ろ！」

「何！」

「グハッ！」

「ッ！・・・護！」

『マスター』

そんな・・・護が。

私は護の所まで走りだしました。

「ガアアアアア」

モンスターが襲って来ました。

「ッ！」

私は目をつぶってしまいました。

「あれ？」

「ここは私たちが。早くマスターの所へ！」

「ありがとう！」

護の所まで来て声をかけます。

「護！しっかりと！」

「ツツ・・・ア・リ・サ・・・」

「護！しっかりと！」

「ア・・・リ・・・サ・・・ちゃん・・・早く・・・逃げて」

「逃げるなんて、あんたを置いて行けるわけ無いでしょ！」

「僕が・・・死ねば・・・彼等は・・・消える・・・そう・・・なれば・・・ア  
リサちゃんが・・・危ない」

「嫌よ！あんたが死ぬなら私も一緒に死ぬ」

「アリサちゃん・・・」

「私は、あんたの事が好きなんだから！」

「アリサちゃん・・・それなら・・・僕に力を貸して！」

「えっ！」

「僕と・・・融合するんだ！」

「どういう事？」

「それは・・・後で・・・話すから・・・今は！」

「分かったわ！どうしたらいいの。」

「僕が言う言葉を続けて。」

「うん。」

「我、汝と契約せし者なり」

「我、汝と契約せし者なり」

「二人の魂、結びてその力を示せ」

「二人の魂、結びてその力を示せ」

「契約者、神上護、アリサ・バニングス」

「契約者、神上護、アリサ・バニングス」

「魂融合！（スピリットフュージョン）」

私がそう唱えると光に包まれました。

（何か暖かい。）

そう思っているよ

「アリサちゃん！」

「護？」

そこには、体が透けている護がいました。

「ちょっと、あんた体が！」

「うん。アリサちゃんも同じだよ」

「えっ！」

私はそう言われて自分の体を確認しました。

「嘘！」

私は驚きました私も護と同じだったからです。

「アリサちゃん、ここはね魂の世界なんだ。」

「魂の世界？」

「そう、魂融合を使うところなるんだ。」

「だから、アリサちゃんにもう一度聞く、僕と融合してくれる？」

「当たり前じゃない！」

「ありがとう。アリサちゃん。」

護は一步一步近づいて来ました。

「な、何!」

「そして、これが最後の契約・・・」

私と護の唇が重なり合った。

そして、私たちの魂も重なり合った。

護

俺は、アリサと融合している。

「力が溢れて来るようだ!」

アリサと融合したことで傷が治っている。

「アリサちゃん・・・ありがとう。」

「(どういたしまして)」

「さて、行きますか!」

「(さっさと終わらせましょう)」

俺は、ある武器を生成する。

「ゼノンの偉大なる魂をここに、闇を切り裂く光の刃出る――  
エクセリオンブレード！」

「行くぜー！」

「ガアアアアア」

「はあああああ」

一閃、右腕を切り落とした。

「ギャー――」

「一気に決める！」

「ゼノンウィンザード」

「はあああああ」

「ガアアアアア・・・アアア・・・」

ドカン――

物凄い爆発音とともにモンスターは消え去った。

「融合解除」

「ありがとう、アリサちゃん！」

「べ、別にいいわよ／＼／＼」

「アリサちゃん！」

「すずか！」

丁度、すずかとアリサのご両親が迎えに来てくれました。

「よかったー！アリサちゃんが無事で！」

「すずか……」

「神上君……」

「はい。」

振り返るとアリサのご両親が声をかけて来ました。

「アリサちゃんのご両親……」

「アリサを救ってくれてありがとう。」

「いえ、大した事はしていませんよ。」

「何とお礼をしたらよいか。」

「顔を上げてください、僕はただ救いたいたから救けたまでです。それに、アリサちゃんと仲直りしておきたかったから。」

「えっ！」

「アリサちゃん・・・ごめんなさい！僕少しやりすぎた。」

「べ、／＼／＼別にいいわよ／＼／＼救ってくれたんだからそれでチャラよー！」

「ありがとう、アリサちゃん。」

「ッ！／＼／＼／＼／」

「ふ、ふん！」

「お礼と言っては何だが。」

「ですから、お礼は・・・」

「アリサと許婚になってくれないか。」

「「えっ！」」

「「ええー！ー！ー」」

「ちょっと待ってくださいー！」

「なっ何考えてるの！お父さん！お母さん！」

「これは、私たちの総意だ」



第六話 仲直りと絆の力（後編）（後書き）

司馬遷

「今回は少し長くなりました。」

護

「それに、かなり時間かかったな。」

司馬遷

「なかなかアイデアが浮かばなくて。」

「今回は新しい能力を作ってみたんだけど、どうかな？」

護

「どう？て言われてもまだ分からないのが現状だし」

司馬遷

「仕方ない。説明しよう。」

「スピリットフュージョン魂融合は文字どおり、魂と魂を融合させるもの、それに、絆の力  
と思いの力が必要になってくる。」

その絆と思いの力が強ければ強い程、威力は上がる。こんな所かな。」

護

「凄いな！」

司馬遷

「それじゃあ今日はここまで、また次回お会いしましょう。」

第七話 許婚騒動(前書き)

久しぶりの投稿です。

## 第七話 許婚騒動

護

困った事になった。

アリサと許婚になるとは思わなかった。

アリサ達の世界では当り前の事なのだろうが正直言って合点がいかない。

何故、俺なんだ？

「ですから、まだ早いですって許婚は！」

「神上君しかアリサに相応しい人はいないよ！」

「ちょっと！お父さん達！何考えてるの！」

「アリサのこの性格だから相手が見つかるかどうか分からなかったからね。」

「それに、君がアリサの傍にいてくれればアリサが攫われなくて済むからね！」

「だから、お願い。アリサの事頼んでいいかしら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「護・・・・・・・・」

「・・・・・・・・分りました。」

「ありがとう！」

「但し、条件があります。」

「なんだい？」

「許婚の話は延期にしてもらいたい。」

「何故だね？」

「たとえ許婚だと言ってもいつ何が起きるか分かりません、相手が早死にしたり事故に遭ったりする事だってあります。」

「それに・・・」

「それに・・・なんだい？」

「アリサを悲しませたくありませんから・・・」

「護・・・・・・・・」

「分かった。許婚の件はまた今度にしよう。」

「ありがとうございます。それでは、アリサの騎士の役目謹んでお  
請け致します。」

「済まないね。」

「それでは失礼します。」

「護……ありがとう。」

「別にいいよ。許婚と言う枷に縛られたくなかったから伸ばしてもらったんだ。」

「どうして？」

「お互い知らない事だらけだしな。」

「そう……ね。」

「でも、本当にいいの。許婚が私で。」

「別にいいよ。僕はアリサのこと嫌いじゃないから！」

「ッ！／＼／＼／＼／」

「そ、それならいいのよ。私も護のこと嫌いじゃないから！」

「そう、それなら良かった。」

「えっ！」

「歪み合ったままじゃ許婚どころの話じゃないからね。」

「そ、そうね！」

「それじゃ、すずかの所に行こうか。」

「どうして？」

「すずかも、かなり心配してたから。」

「あっ、そうね。」

すずかの家に向かっているとときに考えていた。

（ヘルガ・・・お前は何を企んでいる。当分は様子を見るとするか。）

月村邸についた俺たちは、また驚く事になった。

何でもすずかの両親が俺を許婚にしたいと言い出したそうだ。

俺がアリサを救けた事を何処かで聞いたらしい。

「すずかの両親もか！」

「ごめんね、護君・・・」

「仕方ない、また説き伏せるか！」

コンコン

「どいぞ。」

「失礼します。」

「ほうー。君が神上護君かね。」

「はい。」

「まあ、座り給え。」

「それでは、お言葉に甘えて。」

「今日は何のようだい。」

「さすがに会いに来たのですが、偶然にも許婚の話を目にしまして。」

「もう知っているのかい！早いな。後日改めて連絡しようと思ったのだが。」

「本人から聞きましたので。」

「そうか・・・さすがが」

「それで、どうしたのかね。」

「実は・・・」

「そういう事が、分かった。許婚の話は後にしておこう。」

「ありがとうございます。」

「すずかの事、頼んだよ。」

「謹んでお請け致します。それでは、失礼致します。」

「護……」

「神上君。」

「うん。大丈夫。」

「許婚の話は延期にしてもらったよ。」

「その代わりに、すずかの騎士の役目を任せられた。」

「えっ！」

「つまり、私たちの騎士って言う事？」

「そういう事。」

俺はそう言つと片膝を着いた。

「この不肖、神上護。誠心誠意、お二人をお守り致します。」

「それじゃ、僕は帰るね。」

「う、うん。また明日。」

「またね。」

そう言うと、俺は家に帰った。

アリサ・すずか

「……………」

「……………」

「好きになっちゃったみたいだね。私たち。」

「う、うん。」

「私、負けないから！」

「すずか？」

「好きになった者同士どっちが先に落とすか勝負だよ！アリサちゃん！」

「そうね、私も負けないから！すずか！」

翌日

「アリサちゃん！大丈夫だった！」

「なのは。」

事件のことを知ったのだろう。  
最初の言葉がそれだった。

「なのは、私なら心配しなくても大丈夫よ。  
ちゃんと此処にいるじゃない。」

「でも、アリサちゃんが無事でよかった！」

「アイツが助けに来なかったら今頃どうなってたか。」

「アイツって。誰のこと？」

「その内、分かるわよ。」

これが護との約束。

なのはには、まだ秘密にしておきたいらしい。  
(なんでだろう?)

「アリサちゃん・・・？」

「何でも無い。」

ガラガラ

「あっ神上君！おはよう！-」

「おはよう。なのは。」

護

「あっ神上君！おはよう！-」「おはよう。なのは。」

（そろそろフェイトと出会う頃だろう。）

（何事も起きなければいいが。）

???

「あと少しで私の願いが叶う。フェイト、早く見つけて来るのよ。」

「???

「あと少しでお母さんの願いが叶う。アルフも少しの辛抱だよ。」

なのは

（アリサちゃんが攫われてから、アリサちゃんと神上君、仲直り出来たみたい。）

（でも、アリサちゃんここ最近、神上君と一緒にいるときが多い気がする。）

「はあ〜」

「ん、」

「どうしたの、なのはちゃん？」

「えっ！ううん、何でもない！」

「そう、それならいいけど。」

「ありがとう、神上君。」

「何か悩み事があるなら相談してね！力になるから。」

（神上君、私のこと心配してくれてるんだ。）

「優しいんだね！ありがとう。」

「やっぱり、笑顔の方が似合うよ！なのはちゃんは

「ッ！／／／／／／／」

「あ、ありがとう。」

（そんな事言われたら照れちゃうよ！／／／／／／／／／／／／）

「そっだ！今度私のお店においでよ！..」

「どうしたの急に。」

「ちょっとお礼がしたくて。」

「いいよ、別に。」

「行きなさいよ！..」

「アリサ・・・ちゃん」

「なのはちゃんのご両親が働いているお店ですから、翠屋は。」

「すずかちゃんまで。」

「あそこのケーキは美味しいのよね。」

「有名ですから。」

「と言う訳で、今日はアンタの家に連れて行きなさいよ!」

「何で?」

「アンタの家だけ知らないのよ!」

「………無理。」

「俺、一人だから。」

「えっ!」

「親がないんだよ、俺には。」

「学費とかどうしてるの。」

「召し使いみたいな人がいるから、その人達が賄ってる。」

「まあ、親みたいな人だね。」

「そう、それなら家の場所ぐらい教えなさいよ。」

「それぐらいなら、良いけど。」

「でも、護君の家に行きたかったな。ちょっと気になるし。」

「そうね、許婚だし。あっ!」

「アリサちゃん！すずかちゃん！許婚ってどういう事？」

「あちゃー言っちゃた。」

「3人供、どついう事？」

「うーん、仕方ない。」

「実はね、なのはちゃん、アリサちゃんを救けたのは護君なんだよ。」

「

「えっ！ええー！ー！ー！ー！」

「それでね、アリサちゃんのご両親が護君を許婚にしたの。」

「でも、護はそれを断った。まだ早すぎるからって言って。」

「その代わりに、ボディーガードを引き受けてくれたの。」

「すずかも同じようにね。」

「そ、そっか。だから、いつも護君と一緒にいたんだ。」

「ごめんね、なのはちゃん隠すつもり無かったんだけど。」

「ううん、大丈夫、気にしてないから。」

「嘘を言つな！なのは！」

「えっ？」

「お前は、いつも一人で全てを抱え込んで、誰にも相談せずに一人で解決しようとする。違うか！」

「ッ！」

「お前のお父さんが怪我で入院した時、お前は家で独りぼっちだったはずだ。」

「どうして、そのことを。」

「やっと出来た友達がアリサとすずかで、なのに！お前は、また一人になるうとしている。本当にそれでいいのか、なのは。」

話し終わるとなのはが泣き出した。

「私、みんなと一緒にいたい、ずっと一緒にいたい！」

「やっと素直になったな、もっと我儘言っていんだよ、なのは。」

「少しは、スッキリしたか。」

「う、うん。ありがとう。」

「と、言うわけで今日は、翠屋に行くことにした。」

「えっ？」

「いいよな、なのは？」

「うん！」

うわー笑顔が眩しい。

魔王とは思えない、笑顔だな。

そつえば、なのはの家って、道場やってるんだっけ。一度やってみるか。

「なのは、確かお前の家って道場してたよな？」

「うん、そうだけど。」

「なら、挑戦してもいいか？」

「別にいいけど、正直言ってお父さん達強いよ。」

「知ってるよ、それぐらい。」

「でも、どうして挑戦なんか。」

「俺には、二つ名があつてね、『平成の呂布奉先』って名前があるんだよ！」

「呂布ってあの呂布？」

「やっぱり知ってたか、なのは。」

「うん、お父さんが言った、中国史上最強の男だって。」

「その通り、万夫不当の豪傑、関羽や張飛が二人ががりでも倒せなかった男だ。」

「流石だね。」

「まあね、三國志の事になると熱が入っちゃう。」

「それだけ自信が有るんだ。」

「じゃあ、伝えとくね。」

翠屋についた俺達は席に着いてケーキを頼む事にした。

「何にするか決まった？」

「あっお母さん!」

「お邪魔してます。」

「いらっしやい、アリサちゃん、すずかちゃん。

あら？その子はお友達かしら？」

「紹介するね、学校に転校してきた、神上護君。私の新しい友達だよ。」

「初めまして、神上護です。」

「初めまして、なのはの母の高町桃子です、よろしくね!」

「こちらこそよろしく願います。」

「礼儀正しいわね。」

「ありがとうございます。」

「それに、女の子みたいで可愛い!」

「お、お母さん!」

「桃子……。」

「土郎さん、お帰りなさい。」

「あっお父さん!」

「ただいま、なのは。桃子、その子を離してやりなさい。」

「はい。」

「お父さん、紹介するね、新しい友達の神上護君。」

「初めまして。」

「初めまして、父の高町土郎です。よろしく。」

「こちらこそよろしく願います。」

「それでね、護君がね、道場の事を知って挑戦したいって言うてるんだけど。」

「護君、本当に言ってるのかい。」

「はい！」

「分かった、じゃあ道場で準備して待ってるよ。」

「ありがとうございます！」

「うん。」

「土郎さん・・・手加減無用ですよ。」

「本気で言ってるのかい。」

「もちろんですよ。」

「怪我するかもしれないよ。」

「怪我はしませんよ。」

「そうか。」

「むしろ、土郎さんの方が怪我するかもしれませんよ。」

そういつと、俺は土郎さんに向かって殺気を飛ばした。

士郎

「怪我するかもしれないよ。」

「怪我はしませんよ。」

「そうか。」

「むしろ、士郎さんの方が怪我するかもしれませんよ。」

私は、護君の言葉に驚きを隠せなかった。

それと同時に、彼と目が合った瞬間、彼から物凄い殺気を感じた。

（凄い殺気だ、この殺気かなりのやり手だな。

こりゃ本気出さないと、本当にこっちが怪我しそうだな。）

そう思った私は、道場へと足を向けた。

なのは

（とてつもなく、凄い試合になりそうな気がする。）

「凄い事になってきたね。」

「うん。」

「はあく大丈夫かな二人供。」

護

俺は今、道場にいる。

相手はもちろん士郎さん。観客には何故か桃子さんとなのは、アリサ、すずかの4人が座って観ている。

「そろそろ、始めようか。」

「はい！」

「本気でいきますよ。」

「私も、本気で相手をしよう。」

二人の決闘が今幕を開ける！

第七話 許婚騒動（後書き）

今回は少し長めになりました。

なかなかストーリーが浮かばないんですよ。

それでは、次回もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5565x/>

---

魔法少女リリカルなのは～その者、神を越えし力を持つ者

2011年12月15日23時53分発行